

ジェイムズ哲学における身体概念について ——意識経験と感性的身体の関係性を巡って——¹

文学研究科哲学専攻博士後期課程3年
藤坂 大佑

はじめに

本稿の目的は、ウィリアム・ジェイムズの思想展開における身体概念の位置づけの変遷を跡付けながら、そこで示される経験の生成の契機を探ることにある。初期の心理学研究においては、自我を形成する中心的要素（意識に影響を及ぼす感覚的部位）としてみなされていた身体は、後の純粹経験論の展開においては、両義性を有するものとして精神的経験と感覚的経験を結び付ける「経験の中心点」として扱われることとなる。こうした身体の位置づけの変化が、後の経験の関係性を巡る思索の展開と相俟って、最終的に経験の生成の契機を巡る問題へと結実することとなる。この点について、まずジェイムズの思想展開における身体の捉え方の変遷を概括し、次いで身体をプラグマティズムの実践的側面との関連で捉えたりチャード・シュスターマンの主張等も参考としながら考察してゆきたい。

1. 意識経験、知覚経験を巡る身体の位置づけ—ジェイムズの思想展開と身体の把握—

1.1 自我と空間性を巡る身体

初期の『心理学原理』では、身体は特に自我論が展開される局面において、自我を形成する際の中心的な役割を担うものとして、その特質が示される。心理現象の記述においては「科学的心理学の方法に準ずる」ことに徹底するジェイムズの視座²から捉えられた自我論の枠組みを軸とし、心理現象の中で見られる身体の位置付けについて確認してゆきたい。『心理学原理』では心理現象の分析的記述が主な内容として展開される。それ故、身体そのものが主題として扱われることはない。しかし、身体的行為と心理現象のあいだに密接な関係性が存在することが、『心理学原理』のみならず、後に展開される純粹経験の哲学においても、意識的な経験を中心とした経験場面の記述において示されることとなる。

心理現象としての自我について記述するにあたり、ジェイムズはまず知者としての自我

(主我 I) と被知者としての自我 (客我 Me) というように、自我を機能別に二分して捉える。その内の客我とは、概して述べると「考え得る最広義においては、人が我がものと呼び得るすべてのものの総和」³として示されるものである。この際、客我は自己の身体や心的能力のみならず、身に着けている衣服や自分の家、家族など、いわば「自分のもの」と考えられるもの全てが含まれており、それらは自己に対して同じ情動を喚起するものとされる⁴。このように示される客我の定義の内では、身体は「美しい身体を持つか、醜い身体を持つか」という違いによって引き起こされる感情や、それによって生じる自己追求の意識の相違などが、それを通じて与えられるところの「物質的自己の核心」として論じられる⁵。こうした具体的な意識様態を基盤とする自我論において、身体は基本的に素朴な感覚的経験に依拠して把握されることとなる。実際、ジェイムズ自身も「それ (主我) は、心理学上の目的から、靈魂のような不変の形而上学的実体である必要もないし、『時間を超越した』ものとしての先験的自我 (エゴ) のような原理である必要もない」⁶と論じており、そこではあくまで「心の状態」を措定するのみで、その成立根拠となるものは何か、と言ったような形而上学的問題については埒外のものとして取り扱われる。

このような問題意識を踏まえた身体の特徴づけは、「空間質 the spatial quale」の問題においても取り入れられている。空間質とは、単純に「ある要素同士の位置関係」を通じて把握されるような空間性ではなく、「暖かい風呂に入った時の皮膚の感じは、針でつついた時の皮膚の感じより大きい」という例で示されるような、感覚そのものに備わる空間性の質の存在についてジェイムズが示したものである。この空間質の問題においては、身体は感覚的な延長の一部と見なされる。この点については、エドワード・リードが「伝統的な心理学の観点からすれば、こうしたジェームズの考えは、魂に延長があるとする異端説 [……] に等しい。また新心理学の観点からすれば、それは、心と思考の働きを身体と感じとに帰属させてしまう異端説に等しいのである」⁷と指摘しているように、心的機能や意識状態が、身体感覚と同属なものとして扱われているように思われる⁸。

以上のように、「素朴な感覚に帰せられるもの」として論じられる身体は、一見すると、「身体のある部分を通じて意識様態に何かしらの影響が及ぼされる」という関係性を中心とした、意識的な経験のみに準じて捉えられた特徴しか示されていないように思われる。しかし、ジェイムズが後に展開する純粹経験の理論によって、意識的経験の範疇内で示されるものとは別様の機能を有した身体性が取り入れられることとなる。

1.2 「活動性の経験」における純粹経験論と身体の関係性

人間の「活動性 activity」に焦点が当てられた論文「活動性の経験」において、ジェイムズは身体を「視覚や行為、関心の中心点に座すもの」と表現し、主体の機能の中心として位置付ける。経験が形成される過程において、身体を有する「私」という視点は「活動の不断

の強調点)、ないしは「活動の展望と関心の感じ」として現れる。個人的に経験される世界は、自身の身体を中心として自らに現れてくるのである⁹。その中で身体は、「身体が存在する場所が『ここ』であり、身体が行為する時が『今』であり、身体が触れるものが『これ』である」¹⁰と論じられる通り行為の軸となり、自身の精神の内的活動性は、あくまで「生ける身体」の「客観的領域内」で経験されるものとして示される。こうした見方に則した自他関係の認識について、ジェイムズは以下のように述べている。

わたしはなぜあなたの精神の存在を想定するのであろうか。その理由は、あなたの身体がある特定の仕方運動することを見るからである。その身振り、顔面の動き、言葉、職種一般が「表現的」であることから、わたしはそれらが自分と同じような内的生によって、自分と同じように活性化されていると考える。¹¹

「私」と「あなた」が何らかの共通認識対象を有していないとすれば、それは「あなたの精神を存在することを想定する理由がなくなってしまう」という独我論的な結果を招く恐れがある。ジェイムズは、「私」の宇宙の中で、「あなた」の身体と「私」が呼ぶ知覚的部分を通じることで、「あなた」の身体を活性化する精神を見る、という認識関係の大枠をここで措定する。その枠組みの内では、ジェイムズが「私とあなたが互いの手で綱を引っ張り合う際、私が知覚するのはあなたの手のみであるはずがない」という例を挙げながら論じている通り、決して知覚的对象としての身体は特権的な地位を占めるものではなく、その周囲に存在する物理的な知覚対象もまた、「私」と「あなた」の共通認識対象として論じられる。こうした身体を通じた知覚については、以下のようにも論じられている。

あなたが内側から活性化し感じているあなたの身体は、わたしが外側から見て触れるあなたの身体と同じ場所になければならない。[……] あなたが内側から感じ、わたしが外側から感じるその身体が、真実にはいかなる組成からなるものかということについて、われわれのどちらかがさらに詳しい知識をもつとしても、その新しく概念化され知覚される組成が帰せられるべきところは、その同じ場所にたいしてである。¹²

前述した「私」と「あなた」の間の「精神的交流」についても、同様の場所において為されるとジェイムズは述べている。ジェイムズは「ジェイムズ＝ランゲ説」¹³としてよく知られている通り、「怒り」や「恐れ」等のような感情を、精神の変容としてではなく、同時に身体の変容として捉えている。こうした把握の仕方においては、「われわれの『思考』という複数の意識の流れを主として支配しているのは、経験が我々にとっても興味や意義、経験が引き起こす情念や役立つ目的であり、いいかえればそれらのもつ感情的な価値である」¹⁴と述

べられるところの、情感性を軸とした思考の流れの変容の只中において、その核となる一種の受容器官としての役割を担うものとしても、身体が扱われることとなる。

こうして捉えられる身体は、以下の様な両義性を持つものとして示される。

われわれの身体はそれ自体が両義的なものの格好の例である。わたしは時として自分の身体を純粹に外的な自然の一部として扱う。また、わたしは時としてそれを「自分のもの」として、「わたし」とともに分類し、その局所的な変化や限定を精神的な出来事として了解する。身体の氣息運動はわたしの「思考していること」であり、その感覺的調整はわたしの「注意作用」であり、その運動體感的な変化はわたしの「努力感」であり、その内臓の動揺はわたしの「情念」である。¹⁵

ここにおいても「精神的なもの」と同時に「物理的なもの」として扱われ得る身体の区別が、純粹經驗の理論に則しつつ論じられる。特に身体感覺については、『心理学原理』における意識論で「暖かさintimacy」の感覺が身体と自己意識を結びつける紐帯としての重要な役割を担っていた¹⁶。この一連の認識が感覺を通じて為されるという主張は、最終的に主客身分の境地が根源的な「感じfeeling」へと帰せられる純粹經驗の理論の特質を示すこととなる¹⁷。

以上をまとめると、まず初期の科学心理学的観点においては、意識様態に影響を及ぼす延長的部分、かつ自我を形成する中心的な構成要素として身体が位置づけられていた。純粹經驗の理論においては、個人的な經驗の全体を組織化する、関係づけのための機能的中心として位置づけられる「私」の意識作用の、具体的な經驗の様相を示す言わば「生ける身体」として、經驗的場面における位置付けが更に拡張されて示されるようになるのである。

2. 身体と「感じ」—心理学的經驗、純粹經驗の根源性を巡って—

2.1 実践的問題としての身体意識への気づき—シュスターマンの身体論との関連において—

前節で論じた通り、純粹經驗論においては、經驗の原初的な状態は「感じ」として示される。この「感じ」と經驗を構成する中心的機能としての役割を果たす身体の位置づけの関連性について、リチャード・シュスターマンが論じる「非論弁的・直接的なあらわれ」として示される「身体感覺」を手掛かりとしながら考察してゆきたい。

シュスターマンは彼の根幹的主張である「身体感性論somaesthetics」との関連において、プラグマティズムの思想と身体の根源的な結び付きを示す。彼の提唱する身体感性論とは、雜駁に述べると、論理化以前の直接的な經驗に還帰し、プラグマティズムの思想が有する実践的側面に沿う形で、「生き方の改善」として身体的実践の多様性の批判を目的とする主張である。シュスターマンが身体的經驗に着目する理由のひとつは、ジェイムズとデューイのプラグマティズムにおいて見られる直接的な經驗を基盤に据える視点を、ローティ以降の言

語論的展開以降のプラグマティストの経験観と対比させたいうで、プラグマティズムにおける「経験」の位置づけを改めて問うことにある。しかし、「論理化以前の直接的な経験の重要性への問い」とは、そのような内的な次元の存在を指し示すだけでは、それ以上踏み込むことのできないような空虚な問いへと墮する危険性がある。実際、シュスターマンはこの点を危惧している¹⁸。とは言え、非論弁的な身体性への問いは言語を介して主題化するのは困難である。そこでシュスターマンは哲学の「身体的な実践」を新たな問いとして提起するのだが、その実践へと我々を導く契機のひとつが、身体への根幹的な「気づき」にあると述べる¹⁹。

例えばシュスターマンは美学研究において、知覚の変化によって、「観念の固定的なベール」に覆われていた事物が本来的に有する質的側面に気づくことができ、その際に知覚は美を捉える能力としての感性へ変容すると主張する²⁰。これは、「より良い経験を与えるために現実を変容させること」²¹というプラグマティズムの根本方針がシュスターマンの主張する身体的実践においても指針となっていることに関連している。シュスターマンにおいては、意識的な行為の中心に座する身体の無意識的な状態への「気づき」から、身体の本来の在り方を捉え、その点から経験の改善を企図することがプラグマティズムの基本方針として示されることになるのである。こうした点に基づき、シュスターマンはジェイムズの後に展開されるデューイのプラグマティズムにおける着想について以下のように述べる。

哲学は伝統的に論弁的理性に焦点を当ててきたのだけれども、人間の實在について十全な説明を与えるという哲学の前提とされる任務は、非論弁的な経験の役割を認めることを要求したのである。さらに、プラグマティズムは實在を単に説明するだけでなく、それを改善しようとするのであれば、非論弁的な経験の価値は、実現されるべき企てとして、さらに一層重要になるだろう。そして、その重要であるにもかかわらずきわめておろそかにされてきたものが、身体なのであった。²²

ここで論じられているのは、あくまでデューイにおける「非論弁的な直接的経験」の重要性についてであるが、こうした経験の核としての身体の位置づけは、ジェイムズにおいて純粹経験に基づく経験の形成の根源性が、身体の直接的経験へと帰属させられている面を有していることから窺えるように、直接的な経験に還帰し、経験を「改善しようとする」企てを前提に据える諸々のプラグマティズム的発想に共通するものとして理解し得るであろう。しかし、ここで留意せねばならないのは、前に述べたように、非論弁的な身体的経験への固執に伴う問いの空虚化である。ここまでは未だ身体の追究が、殊にプラグマティズムにおいていかなる意味を有するかという、ごく一部の問題しか扱われていない。こうした身体の位置づけがジェイムズ哲学においていかなる意味を有するか、更に検討してゆくこととしたい。

2.2 感性的身体への還帰の意義—経験と身体に関する解釈の問題—

前述した直接的な身体感覚への還帰について、ジェイムズ自身は、それに対する反省が行為の抑制化に繋がることを懸念している。例えば、ジェイムズは『心理学原理』の「習慣」の章の結論部において以下のように述べている。

したがって全ての教育における偉大な事とは、我々の神経を敵とする代わりに味方とする事である。それは我々が習得したものを蓄えて利用し、その蓄えの利益によって安心して生きる事である。これにより、我々は可能な限り早く、かつ多くの有益な行動を自動的・習慣的なものにしなければならず、伝染病から身を守るように、我々にとって損失になるような方法に順応してしまう事から身を守らねばならない。日常生活の些細な事を、無意識的行為における努力を要しない管理に委ねる事ができればできる程、心の高等な力は、それに適した仕事の為の自由な状態になるであろう。以下のような人間ほど悲惨な者はいない。つまり習慣的でなく優柔不断であり、タバコに火をつける事、水を飲む事、毎日の起床時間と就寝時間、そしてすべての些細な仕事が、はっきりした意志的思案の対象であるような人間である。²³

この記述を踏まえると、確かにジェイムズにおいては身体への内省が身体行為へ悪影響を与えうるものとして見なされている節があるように思われる。これに対し、シュスターマンはそうした反省を促すことにより行動や習慣の改善化を図るのである²⁴。しかし、これはあくまで意識現象に則した、道徳的・実践的な場面における身体行為への影響であり、ジェイムズ哲学において示される「身体」もしくは「身体行為」とは、彼の思想展開に伴う経験の拡張的な解釈によって、それ自体もこうした場面に限定されない意味合いを表わすことになるように思われる。

繰り返し論じている通り、ジェイムズは、純粹経験の理論においては主体と客体が分化する以前の根源的な「感じ」を経験の原初的な状態であると述べる。これを経験の起点とし、経験が展開される中で諸々の関係性が生まれ、身体それ自体も、経験の文脈内における関係性を基に把握されることとなるのである。たとえばジェイムズは以下のように述べている。

われわれの身体はそれ自体が両義的なものの格好の例である。わたしは時として自分の身体を純粹に外的な自然の一部として扱う。また、わたしは時としてそれを「自分のもの」として、「わたし」とともに分類し、その局所的な変化や限定を精神的な出来事として了解する。身体の氣息運動はわたしの「思考していること」であり、その感覚的調整はわたしの「注意作用」であり、その運動体感的な変化はわたしの「努力感」であり、その内臓の動揺はわたしの「情念」である。²⁵

ジェイムズは、かつて繰り広げられてきた情感と身体の関係性の論争の展開は、経験の中で身体を精神的もしくは物理的なものとする事を内観introspectionによって決定する事の困難さを示しており、「それは間違いなく個々の経験に内在的なものではありえない」²⁶と述べる。この区別は、経験同士の相互作用の仕方や関係のシステム、それを考察する際に適当だと考えられる文脈によって変化する。つまり、身体の扱われ方も経験の展開の仕方次第で把握の仕方が変わる両義的なものとして見なされているのである。

ジェイムズは『根本的経験論』において、「生の流れ」に準拠し、その内で可感的・直接的な経験を通じて実在性を見いだす方法を採用した。経験の中核として身体を捉え、なおかつそれを抽象的概念に変容させない形で経験の概念の拡張をも目論むジェイムズの思想と身体との関わりは、身体行為を改善するための反省を起点とするよりも、むしろそうした身体の在り方に根本的に関わっている「感じ」としての様態から産出される、経験の生成との関連性において理解される必要があるのではないだろうか。

「感じ」と「実在」へ還帰する身体論—結論に代えて—

これまで論じてきたように、ジェイムズの思想展開において、経験の中心的機能としての身体と経験の生成の仕方を結びつけるものの一つとして、意識経験の原初的狀態である「感じ」が挙げられる。個人的経験における「感じ」への執着による客観性の視点の欠落をジェイムズ自身が危惧していることに留意せねばならないが²⁷、この点から、単なる主観的経験の流れに留まらない特質を有したジェイムズ哲学における経験の生成の一端を示し得ると思われる。

例えばリチャード・スティーブンスは身体反応が単なる反射作用として理解される場合、「意識の様態modality of consciousness」としての「感じ」の特質を捉え得ないとし、その意味範囲の広さを以下のように指摘する。

私が世界内の何らかの対象を知覚する際、私は身体変化に気付くのではない。加えて情動的な経験をする際、私の意識は身体的な妨害disturbanceに直接的に方向付けられるのではない。そうではなく、世界の何らかの悦ばしきや恐ろしきに則して方向付けられているのである。[……] 情動は単なる反射では有り得ない。何故なら、それはまさに感じの様態だからである。そして、あらゆる感じは世界に属する経験なのである。²⁸

ジェイムズは自然主義的な発想に基づき、我々の関心を刺激し、それを揺り動かすものが実在的であると主張する。意識経験においては注意される限りにおける経験が我々にとっての経験と見なされるが、こうした経験は単なる反射作用として捉えられるべきではない。「実

在を直接に得るということが人間の創造的活動につながり、われわれの生そのものを価値あらしめると考えられなければならない²⁹という三橋の指摘からも窺える通り、多義的な意味合いを含んだ「感じ」を基盤とし、実在性に直接的に触れ経験を構成するという、一見すると素朴な態度から出発することで、初期の心理学的な水準の問題も範疇内に取り入れた、経験世界と身体との関わりの生成について論じ得る点が存すると考えられる³⁰。

¹ 本稿の内容は、「アメリカ哲学フォーラム 第4回大会」（2017年、於：東京女子大学）における拙発表報告「ジェイムズ哲学における身体の位置づけについて—意識経験と感性的身体の関係性を巡って—」に基づく。

² ジェイムズは『心理学原理』の序章において、自然科学として心理学を取り扱うことを明言しており、「意義と真理を吟味する」哲学との方法的差異を示している。本書で取られているのは、あくまで心理現象の分析的記述に徹底するという立場である。つまり、科学や物理学などの諸科学によって受け入れられているデータを一先ず無批判的に受け入れ「暫定的知識体系」を構築する事が自然科学としての心理学の目的となる（William James, *Psychology; Briefer Course*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1984, p. 10（今田寛訳、『心理学（上）』、岩波書店、1992年、23頁）。

³ William James, *The Principles of Psychology*, Volume. I, Dover Publications, Inc., New York, 1950. (abbr.*PPI*), p. 291.

⁴ *Ibid.*

⁵ *Ibid.*, p.292客我はこのような自分の体、家族、財産など「自分のもの」として考えられる「物質的自己」の他に、集団的意識により発生する承認の欲求に見られるような「社会的自己」や感覚能力、情動、欲求など自分の意識状態や心的状態の集合である「精神的自己」の三種類の構成要素によって築かれるものであるとされる。

⁶ *Ibid.*, pp. 299-300.

⁷ エドワード・S・リード『魂ソウルから心マインドへ — 心理学の誕生』、村田純一・染谷昌義・鈴木貴之訳、青土社、2000年、290頁。

⁸ これは空間性を意識の外部で生じるものとする新心理学者（カール・シュトゥンプフ等）の主張に対し、「単に感覚的出来事が引き金となって心から導き出されるだけで直接的に意識されることのないものは、実際に意識の流れの内部に存在するのだ」という「明確に意識されない」意識状態に意識内容の充実さを見る「意識の流れ」説に準じた主張であると言える（同上、同頁を参考）。

⁹ William James, *Essays in Radical Empiricism*, Longmans, Green, and Co. New York, 1912. (abbr.*ERE*), p. 170（伊藤邦武編訳『純粹経験の哲学』、岩波書店、2004年、236頁）。ここでジェイムズは、経験される世界を「意識野」と呼んでいるように、ここで示される「経験」の意味は、

あくまで意識的に感じられるものとしての経験である。

¹⁰ *Ibid* (同上).

¹¹ *Ibid.*, p. 77 (伊藤訳、82頁).

¹² *Ibid.*, pp. 84-85 (伊藤訳、89~90頁).

¹³ 「ジェイムズ＝ランゲ説」とは、「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのである」という典型例によって示されるように、感情が表出する原因について、それを内的な感情ではなく身体的変化に求める説である。ジェイムズは純粹経験論においても、身体的生（身体的活動）が自己の意識を構成する基盤となることを示している。

¹⁴ *Ibid.*, p. 151 (伊藤訳、157頁).

¹⁵ *Ibid.*, p. 153 (伊藤訳、159頁).

¹⁶ 『心理学原理』において、自我（客我の集合体）が形成される際に、その拠り所となるものが、「同一であるという感覚」としての「暖かさwarmth」であると論じられる。身体についての意識は特に強い暖かさを持ち、自我という集合体を構成する意識内容の中心部とされる。「記憶は直接の感じに似ている。その対象は、単なる概念の対象がもち得ない暖かさと親しさによって満たされている。[……] この現在が確かに私であり、私のものであるように、その他何であれ、これと同じ暖かさ、親しさ、直接さをもって現れるものは確かに私であり私のものである」(*PPI*, p. 239.)

¹⁷ 「純粹経験」の定義とその知覚的経験としての展開の在りようについて、次のように述べられている箇所がある。「『純粹経験』とは、私たちが概念的カテゴリーを用いて後から加える反省に素材を提供する直接的な生の流れに、私を与えた名称である。[……] このような状態にある純粹経験は、感じ、ないし感覚の別名 (another name for feeling or sensation) でしかない。ところが、純粹経験の流れは、生まれるやいなや、ここかしこ強調点で満たされて行きがちで、こうして強調されて目立ってきた部分が同一化され、抽象化されることになる。その結果、経験は、まるで形容詞や名詞や前置詞や接続詞などが織り込まれているかのような状態で流れていくことになる」(*Ibid.*, pp. 93-94. 榎田啓三郎・加藤茂訳『根本的経験論』、白水社、1998年、84~85頁)。

¹⁸ リチャード・シュスターマン『プラグマティズムと哲学の実践』、樋口聡・青木孝夫・丸山恭司訳、世織書房、2012年、263~264頁。

¹⁹ 感性的身体への直接的な「気づき」とは、ここにおいてはフレデリック・マサイアス・アレクサンダーが提唱した心身技法、「アレクサンダー・テクニク」の着想に基づいて述べられたものである。これは、「個人によって身体へと向けられる『構成的な意識的統制』という方法を用いて、精神を使うことによる（そして結果的には精神の）働きを改善すること」(同上、260頁)を企図する実践的方法である。シュスターマンはこれを踏まえつつ、「無意識で非論弁的な直接的な質」を、思考に不可欠な指標、規制的な基準として基礎づけるのではなく、そうした質に「気づく」ことを通じて経験の改善を推進することに意義を見出すのである。

²⁰ こうしたシュスターマンの美術研究における基本的態度については、李惠珍「リチャード・シュスターマンの「内在的変容」について：アーサー・ダントーの「変容」論との比較から」、『美学』第246号、美学会、2015年、106頁を参照。シュスターマンはジェイムズに関しても「気づき」の作用が特に心理学的な側面において身体的経験の直接性への還帰への手掛かりとなり、後のプラグマティズムの展開に寄与するという身体感性論の指針に則した解釈を述べている (Richard Shusterman, *Body Consciousness: A Philosophy of Mindfulness and Somaesthetics*, Cambridge University Press, New York, 2008, pp. 159-160)。

²¹ シュスターマン、上掲書、208頁。

²² 同上、257頁。

²³ *PPI*, p. 122.

²⁴ リチャード・シュスターマン「身体意識と行為：身体感性論の東西」、樋口聡訳、『思想』No.1060 (2012年8月号)、岩波書店、2012年、101~102頁。しかし以下のようにシュスターマンが決して非論弁的な直接的経験を身体訓練との関わりのみに基づいて論じている訳ではないことに留意せねばならない。「非論弁的な直接性は、人々の日常の理解と行為において、広い範囲の役割を担っているのである。プラグマティズムは、日常的な経験が本来的に価値の低い領域でないことを強く主張するのだけれども、さらに、日常的な経験は知的な方法によって改善されうると主張する。身体訓練は、そのような方法を提示することを特徴として持つのであり、それゆえにプラグマティズムの考察を保証するのである」(『プラグマティズムと哲学の実践』、365頁)。

²⁵ *ERE*, p. 153 (伊藤訳、159頁)。

²⁶ *Ibid.*, p. 154 (同上、159頁)。

²⁷ 『純粹経験の哲学』、272頁 (訳者解説)。

²⁸ Richard Stevens, *James and Husserl : the foundations of meaning*, The Hague : Martinus Nijhoff, 1974, p. 143. 傍点強調部は原文イタリック体表記。三橋も「感じ」が含意する多義性について以下のように指摘する。「感じの連続性を唯一の経験的事実とみるジェイムズにあっては知覚観念が明確であるかどうかはその実在性をきめるに必要な条件ではなく、むしろ非知覚的経験も、感じの連続性の結果であるとして実在化される余地を残す方が、生活の効用的価値から、必要であったのである」(三橋浩、『ジェイムズ経験論の諸問題』、法律文化社、1973年、116頁)。

²⁹ 三橋、上掲書、118頁。この実在観は『プラグマティズム』で述べられる「哲学」に対するジェイムズの態度によっても示される。「我々個々人にとって重要な哲学とは、技術的な方法ではない。それは、多かれ少なかれ、生が純粹に根深く意味していることについての、我々の低次の感覚 dumb senseなのである [……] 哲学とは、宇宙全体の圧力pushと緊張pressureを、理解し感じる我々の個人的な方法なのである」(William James, *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, New York: Longmans, Green, and Co., 1910, p. 4)。

³⁰ 「感じ」は基本的には『心理学原理』と同様、純粹経験論においても感覺的経験と純粹経験を結

びつけて考える際に経験の根源性として示されるものである。よってこうしたジェイムズの経験に対する解釈は、最終的に多元的な存在論にまで純粹経験概念を拡張させるジェイムズ哲学の一面的な理解に過ぎない。更に本発表においては、ジェイムズの身体論を敷衍することで、「感じ」の多義性をめぐる問題提起が為され得るという粗雑な解釈が示されたに過ぎない。この点については、例えば伊藤は知覚的認識の場面における注意の対象に関わる「感じ」の感知（「あたたかみ」の感知）を基盤としたアフォーダンス理論の検討という形で、具体的に展開の可能性を示している（伊藤邦武「プラグマティズムとギブソン」、『知の生態学的転回1 身体：環境とのエンカウンター』、東京大学出版会、2013年、231-232頁）。

The concept of Body in the thoughts of William James

FUJISAKA, Tasuku

The purpose of this paper is to reveal a moment of the becoming of experiences presented in James's thoughts by examining how James's idea of "body" is treated. In "The Principles of Psychology," he treated a body as a central element of an ego. In "Essays in Radical Empiricism," however, it is treated as 'the center of experience' that has ambiguity linking mental and sensory experience.

Such a change in the position of the body finally becomes a problem surrounding the origin of experience, through the development of the theory about the relation of the experience.

Therefore, this essay investigate these problems with the following procedure: First, we summarize the transition of how James understands the body in development of his thoughts. Second, we also consider Richard Shusterman's claims, which caught the body in relation to the practical aspect of pragmatism.

Finally, it turns out that James's thoughts are based on 'feeling' including ambiguous meaning. From this point, we could discuss the origin of the relationship between the empirical world and the body, which also incorporates the problem of psychology.